

本気の悪役令嬢！

登場人物 紹介

リューク

ブランカの幼なじみで、公爵家の嫡男。攻略対象の一人だが、何かとブランカを構いたがる。

ブランカ

前世の記憶がある侯爵令嬢。この世界が乙女ゲーム「プリマリ」の世界で自分がヒロインの恋を邪魔する悪役令嬢であることを知っている。ヒロインと攻略対象達の素敵なラブシーンを見ることを目標に日々、意地悪をしようと奮闘中。

マリエッタ

「プリマリ」のヒロイン。なぜか、悪役令嬢であるブランカになつき、攻略対象達にあまり興味をしめさない。

ルルー先生

元ブランカの家庭教師。

ダミアン

隣国からの留学生。

ライオネル

「プリマリ」の攻略対象。武力自慢でとても頼りになる。

ユーリス

「プリマリ」の攻略対象。物静かな勉強家。

カイル

この国の第二王子。「プリマリ」のメイン攻略対象。ブランカに優しい。

ジュリアン

カイルの従弟。「プリマリ」の攻略対象で甘え上手。



プロローグ

「ブランカ様、ひどいわ！ こんな幼い子を責めるなんて……。この子が何をしたと言うんですの？」

春爛漫の庭で、銀色の髪はの小さな男の子を腕うでの中に庇かばったマリエッタちゃんが、私を睨にらみつける。肩にかかるゆるふわのブロンドとサファイアブルーの瞳と共に、ピンクの服についたたくさんのリボンも震えていた。

そうそうコレよコレ！ 私は貴女のその泣きそうな顔を見せたいの。キラキラと輝く綺麗な涙が滲にじんだ、宝石のような青い瞳。これを見たら、世の男どもはイチコロね！

さあみんな、可愛くて天使のような優しいマリエッタちゃんにじゃんじゃん注目しちゃってくださいな。この子がこの世界の主役。こんなによい子はめったにいないのよ！

ここは乙女ゲームアプリ『プリンセスガーデン』マリエッタと秘密の貴公子』略して『プリマ』の世界。マリエッタはこのゲームの主人公。そんな世界に転生した私は、彼女の恋を邪魔する悪役令嬢だ。

そして、今はゲームが始まる前の子供の頃。さすが乙女ゲーム、子供といえど登場人物達はみな

容姿が整っていて、とっても優しい。

西洋風のこの世界は前世でプレイしていたゲームの内容そのまま、日常にお城や馬車、ドレスがあふれている。加えて、魔法を使える人までいるという、まさにファンタジーの世界！

そして今、私が何をしているのかというところ——ヒロインである美少女のマリエッタちゃんに絶賛嫌がらせ中。

ああ、でもまだ弱いわね。彼女のいいところをもっと攻略対象達に印象づけなければ。

私は高飛車に言い放つ。

「まああ貴女、いったい誰にもを言っていらいらっしやるの？ わたくしをバレリー侯爵家の者と知ってのことかしら？ 今日のためにわざわざあつらえたドレスを汚されて、黙って見逃すとてもおしい？」

マリエッタちゃんごめんよー。私がすっかり悪役しないと、大人しい貴女は目立たないの。まだ幼いからって気を抜いちゃ、ダメ。今、この場にいるのは、みんな貴女の攻略対象よ？ 優しくしてあげてね。

「ブランカ様、ひどい！」

「ひどい？ どうして？」

ひどいのはわかっている。だって私は悪役令嬢だもの。意地悪しないと意味がないでしょう？

一 転生先はゲームの世界

さて、自己紹介がまだだったわね。

私の名前はブランカⅡシエリルⅡバレリー。カレント王国バレリー侯爵家の一人娘で年齢は七歳。今は王城の庭園で子供達だけのお茶会中だ。

正直、お茶会よりも飲み会に行きたいし、上品な焼き菓子よりもホッケや枝豆をツマミに上司の愚痴を言いたい。

だって私には前世の記憶がある。

私は二十四歳のOLで、楽しみといえば乙女ゲームアプリだけという人間だった。

学生時代から恋愛ゲーム、いわゆる乙女ゲームにハマり、現実の恋愛には一切興味なし。そんな私は残業続きで睡眠不足だったある日、うっかり工事中の穴に落ちこちて絶命した。

最後にプレイしていたのが、この『プリマリ』というわけ。このゲームは美麗な画像——つまりスチルと、声優さんの魅力的な声——イケボが特徴だけど、あまり人気がなかった。それでも、私はこのゲームをこよなく愛していたのだ。

給料をつぎ込み課金アイテムを集めていたほどなのに、すべての攻略対象の好感度を大幅に上げられるという究極アイテム『虹色のドレス』を手に入れられなかったことは残念に思っている。

特に好きだったのは公爵子息のリューク。彼は水色の髪と瞳を持つクールな眼鏡男子で、時々見せる微笑みと甘く掠れた低音ボイスが絶品なのだ。私は彼の声を聴くためにヘッドフォンを買い直した。

いけない、ついゲームについて熱く語ってしまった！

現在の私——ブランカは、淡い紫色の髪に濃い紫色の瞳が特徴の、手足がほっそりとした色白美少女だ。けれど、なんとたつて目つきと口が悪い。だって、ブランカは悪役令嬢なのだ。

私は自分がブランカとして転生していることに気がついた瞬間、悪役令嬢の役目を果たすべく、頑張ろうと決めた。

それはもちろん、憧れのヒロイン、マリエッタを輝かせるためだ。そして、間近で彼女と攻略対象とのいちゃラブを観察するのだ。

ゲームの世界を現実として体験できるって、なんて素敵！

このゲーム、悪役令嬢に命の危険はない。主人公が誰とのエンドを迎えても『侯爵令嬢は国外追放された先で商人と知り合い、平凡だけど幸せな生活を送りました。後日、感謝の思いをしたためた手紙がマリエッタのもとに届いたそうです』で終わる。

本当はゲームの内容も前世のことも断片的にしか思い出せていないけれど、それだけは確か。

手紙ぐらいで済むなら、幾らでも書いて差し上げますとも。

他に覚えているのは、ゲームのスタートが、魔法の才能を見出された十二歳のマリエッタが『王立カルデアアーノ学園』に入学する時だつてこと。

学園は中高一貫で、ヒロインはここで気になる攻略対象といちゃラブな学園生活を繰り広げる。

ただこのゲーム、ストーリーはグダグダ。原因は、悪役令嬢であるブランカの意地悪が生ぬるいせい。いまいち盛り上がり欠ける恋愛エピソードに、ファンは涙を呑んだのだ。

だから、私がしっかり悪役にならなければ！

そんな意気込みのもと、私はこのお茶会に参加している。

他には、八歳のカイル王子を筆頭に、公爵子息のリューク、伯爵子息のライオネル、辺境伯子息のユーリス、先ほどテーブルに身を乗り出してティーカップを地面に落とし、私の服を紅茶で汚してしまった、王弟の息子のジュリアンがいる。彼らはみな、マリエッタちゃんの攻略対象。

そして、女子は男爵令嬢マリエッタちゃんだ。

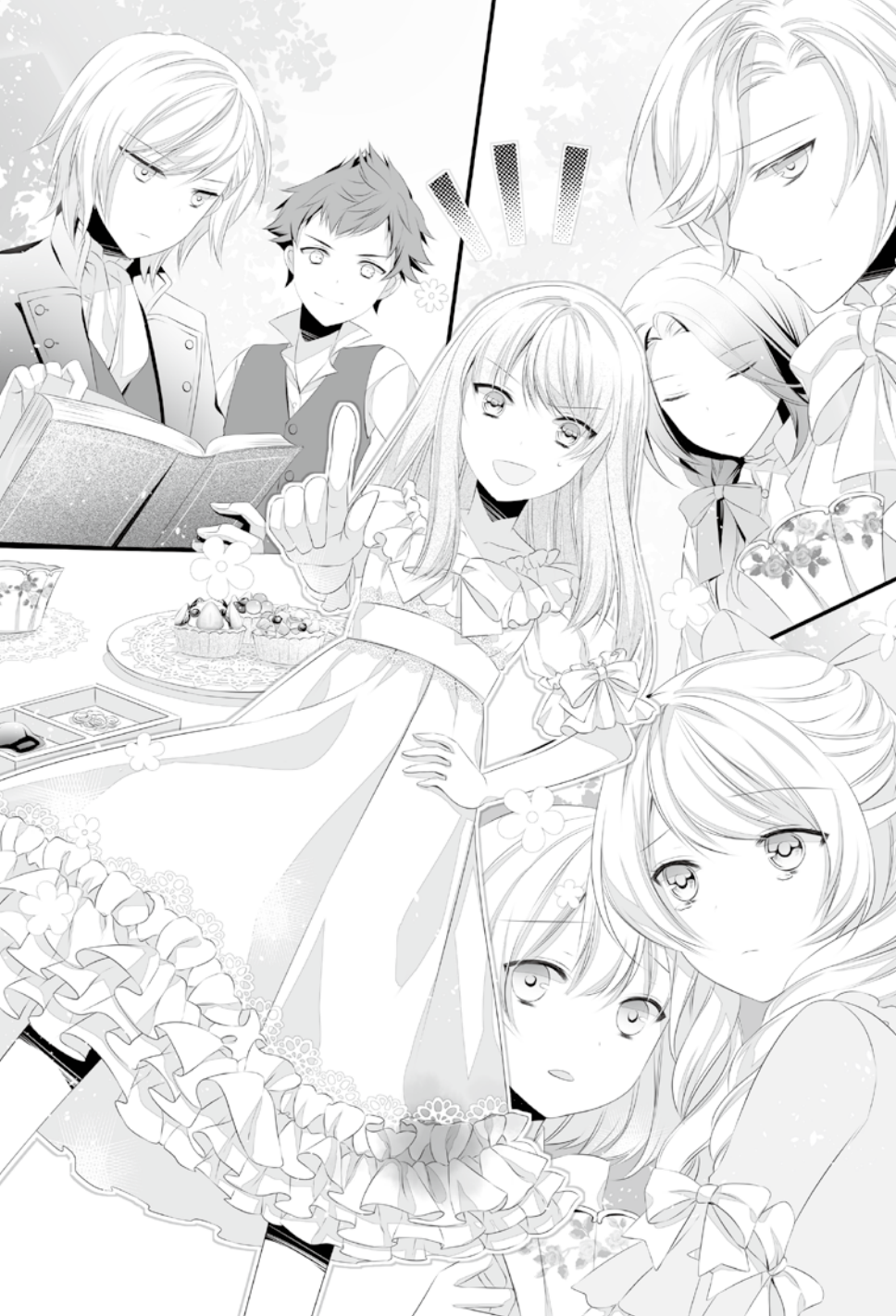
子供だけとはいえ、このお茶会は王子のためにひらかれていて、香り高い上質な紅茶と王室お抱えパティシエ自慢の焼き菓子が供されている。だけど、うっとりしている場合じゃない。

私は気合を入れると、キツとした表情を作り直した。

「ねえ貴方。確か名前はジュリアンだったかしら？ 貴方のせいでお茶会が台なしよ。ゆっくりお茶も飲めやしない」

マリエッタちゃんが震えながら男の子を抱き寄せ、こちらを見上げる。男の子——ジュリアンも大きな目を丸くして私をじっと見ていた。

「ああ、名ばかりの貴族は他者を敬うことを知らないのかしら？ マナーを守れない者を庇って、被害者のわたくしを睨むなんて……」



私はさらにマリエッタちゃんを責めた。

それにしても、マリエッタちゃんってば今日もなんて愛らしい！ ピンクのドレスは金髪に映え、白磁の肌とホッソリした腕はまるでビスク・ドールのよう。ゲームヒロインへの思い入れが強すぎで、このままだと変な趣味に走りそう。

周りの男子、固まってるのでこの可愛らしさをありがたく目に焼きつけておきなさいね！

「そんな！ ブランカ様。何もそんなにきつい言い方をされなくても。貴女は小さな子供に厳しすぎます！」

「そう。わたくしを悪者にするのね。幼いからって何をしても許されるとお思い？ ジュリアンはもう五歳。最低限のマナーくらいはわかるはずよね。それなのにマリエッタ、わたくしを責めるなんて……気分が悪いわ！ 礼儀知らずの貴女と同じ席にいたくないから、失礼させていただきますわね」

紅茶の染みがついた白いドレスをサツと翻し、私は颯爽と芝の庭を後にした。これで存分に私の悪口を言って勇敢なマリエッタちゃんを褒めたたえられるはずだ。

私は悪役令嬢。マリエッタちゃんのをアピールして彼女の恋を邪魔するのが使命だ！

ところが少し歩くと、後ろからタタタツツという軽い足音がする。

何、何、私、何か忘れ物した？

「あの……あの！」

振り向いて確認すると、ジュリアンがこちらに駆けてくる。

さつきまで怯えて震えていたくせに、まさか私に文句を言いに来たの？
「何かしら。貴方、自分が何をしたのかわかっていて？ 子供だからといってマナー違反は許されないのよ？ 貴族ならば、この国の規範にならないとね」

「あの、淑女にご不快な思いをさせてしまつて、ごめんなさいっ」
ジュリアンはそのまま、ペコリと頭を下げた。

か、可愛ええ！ お姉さん持つて帰つて思う存分撫で撫でしたい。

思わずほだされそうになるけれど、そうもいかなかった。
「わかればいいのよ、わかれば。これからは気をつけなさいね、ジュリアン。貴方の態度は貴方だけでなく、将来共に歩む女性の評判にもかかわるのですからね」

そう忠告すると、ジュリアンは大きな緑の瞳をさらに見開いた。可愛いお目々が落っこちそうだが、少しの間、彼は意を決したように言葉を続けた。

「あの、どうして僕の名前を？」

「貴方の名前がどうかして？ 『ジュリアン』で合っているでしょうっ？」
頷く彼を見て思う。

そうよね？ ゲームのキャラクター設定通りなら、間違いないはずだ。

ちなみに、彼はつい最近この王宮に来たばかり。地方領主の祖父の館で育てられていた、王弟の落とし胤だ。その王弟はどうに亡くなり、領主の娘である母親は病弱で、ほとんど構ってもらえずに育つた。最近母と祖父が相次いで亡くなったため、父の生家である宮殿に引き取られたのだ。

王宮側は突然現れた彼の扱いに戸惑い、腫れ物を触るように扱っている。そして、放蕩者でだしなかつた父親にそっくりだと陰で噂をしていた。

そんなふう放置されている彼は、孤独を抱えている。

学園でマリエッタと過ごす頃には礼儀を備えているとはいえ、愛情に飢えたままの彼は、純真な見た目を裏切る肉食系だ。ヒロインとの交流で寂しかった心の隙間を埋め、優しい彼女にどんどん魅せられ惹かれていく――

そんな彼には攻略対象の一人として、強くたくましく品行方正に成長してもらわなければいけない。

せっかくヒロインの恋を盛り上げるのだ、攻略対象も素敵じゃないとね！

私は偉そうに頷くと、さつきとその場を後にした。

悪役令嬢にも怖いものはある。すぐにスカートの染み抜きをしなければ、お母様に怒られてしまう。

「ふふ、でもジュリアンだったら。きちんと謝りに来るなんて、可愛いところがあるじゃない。さすがは『プリマリ』の攻略対象ね。将来がとつても楽しみだわ」

今日のお茶会の成果に、私は満足していた。私がひどいことをすればするほど、ヒロインであるマリエッタちゃんが輝ける。嫌な私と比べて、優しく素晴らしい彼女にみんなが感動すればいい。

それよりも、目下の問題はドレスの裾についた紅茶の染みだった。母が今日のために張り切つて

用意してくれた、リボンが可愛らしい真つ白なドレスは、早く染み抜きしないとダメになってしまう。ただでさえ将来国外追放されてしまう身だ。一緒に暮らしている間は家族になるべく迷惑をかけたくない。

「ダニーいる？ ちょっと借りたいものがあるんだけど……」

私は王宮の調理場近くの窓の下から叫んだ。

以前、王宮の広い庭で迷っていたところを案内してくれたのが、シェフ見習いのダニーことダニエルだった。

「おう、ブランカ。今日のお茶会もういいのか。タルトどうだった？ 俺も少し手伝ったんだぜ」

「美味しかった。ちよつとだけしか食べられなかったけど。それより皿洗い用の石鹼貸して！ 紅茶をこぼしちゃったから染み抜きしないと」

「へ？ お前、侯爵令嬢だろ。そんなことできるのか？」

ダニーが不思議がる。でも私は、だてに二十四年も生きてはいない。

「いいから、早く！」

彼を急かし、石鹼とタオルを借りた。ドレスの裾を洗い、タオルで軽く叩いて水気を取る。

取りあえず応急処置はできたかな？

「ダニーありがと。助かったわ」

お礼を言うのと、ダニエルが笑顔で答える。

「ああ。それぐらいお安いご用だ。そういや前にお前が教えてくれた骨センベイ、昨日作ってみた

ら好評だったよ」

「そう！ で、余りは？」

期待に私の胸が震えた。

魚の骨に塩をまぶして揚げると、お酒のおつまみになる。こちらの世界でもそれが食べたくて、以前、ダニーに提案してみたのだ。

「ごめん、賄いに出したらすぐになくなった」

「えええ。アレ、美味しいから取つといてって言ったのに……。……ところで、ダニーは将来商人になる予定、ある？」

「いや、俺がなりたいのは王宮専属シェフだけど。商人がどうかしたのか？」

「ううん、別にいいの。もしかしたら将来骨センベイで一旗あげて商人になるかと思って」

私の将来は商人のおかみさんだから、もしかしたらダニエルが運命の人かと思ったのだ。

でも違うみたいだし、今はマリエッタと攻略対象達を応援することに集中しよう。

——子供だけのお茶会は、まだ続いていた。

カイル王子の親友として招待された俺、リユークは読みかけの本から顔を上げる。

ズケズケともの言う幼なじみのブランカがいなくなった今、なんとなく寂しい。マリエッタは

女の子らしくて可愛いけれど、大人しいので物足りない。他のメンバーはジュリアンを除けば大抵いつも一緒にいるから、今さら話すことなどなかった。

「あの、カイル従兄様、先ほど僕に注意をしてくれた女性は誰だったんですか？」

席に戻ったジュリアンが早速ブランカのことを聞いている。

「ブランカかな？ ブランカ・シエリル・バレリー。バレリー侯爵の娘で、お前を助けてくれたマリエッタと同じ年の七歳だ。どうしてそんなことを聞くんだ？」

「あの人は名乗った覚えがない僕の名前を呼んで、将来の心配をしてくれたんだ。それがこんなに嬉しいなんて……ここでは誰もしてくれなかったから、知らなかった」

ブランカに興味を示されないよう、カイルはマリエッタの存在を強調した。カイルもどうやらブランカが気になっているらしい。

けれど彼の作戦は失敗したようだ。

本当はみんなわかっていた。ブランカが正しい。だから誰も何も言わなかったのだ。

カイルは口を挟まなかったし、ライオネルはただ驚いていた。ユーリスは真面目な顔で何かを考えていたから、思うところがあつたのだろう。

それにブランカにひどいことを言われた割には、マリエッタはケロツとしていいる。案外、芯の強い子なのかもしれない。もつとも、そうでなければ貴族社会を渡つていけない。ブランカみたいに強すぎるのは問題あるけれど。

「ブランカちゃん、調理場の男性から石鹼を借りて自分で染み抜きしていたぜ。相変わらず、たく

ましいよな」

赤い髪に茶色い瞳のライオネルが言う。好奇心旺盛な彼は、ブランカの後をつけてきたみたいだ。幼なじみのブランカは変わり者で、王子や高位貴族の息子である我々と使用人を同列に扱う。俺も身分にこだわりはないが、将来を考えたら彼女の態度は心配だ。

だからさっきの彼女の発言には少し違和感があつた。マナーの悪さを注意したいのなら、もっと優しく言えばよかつたのに。あの言い方では彼女が誤解されてしまう。ただでさえはつきりした顔立ちだから、きつい印象が拭えない。

でもまあ彼女のよく変わる表情は、見ていて飽きないけれど――

「私、ブランカ様に嫌われるようなことをしてしまったのかしら？」

金髪に青い瞳のマリエッタが聞いてきた。

「初めて会った時、ブランカ様は優しくしてくれたのに。王太后様主催のパーティーで、オドオドしていた私に声をかけてくれて」

あのパーティーには俺も招待されていた。第一王子ラウル様と第二王子カイルの祖母である王太后様は子供がお好きで、国中の貴族の子供が招待されたのだ。

王都だけでなく、地方の貴族の子供にも両王子に年齢が近ければ招待状が届いた。生まれて初めて大きな舞踏会に出席したという男爵家のマリエッタは、さぞかし心細い思いをしただろう。

そこにわざわざ声をかけたというブランカ。いったい何を言ったのだろう。彼女は淡い紫色の髪と濃い紫色の瞳の美少女だが、何せ口が悪い。

「その時、ブランカに何か嫌なことを言われたのか？」

「いいえ。彼女はただ、優しく話しかけてくださったわ」

——マリエッタの話はこうだった。

『やっと見つけた！ 貴女がマリエッタちゃんね。主役の貴女がこんなところにいたらダメじゃない。もつと堂々としていないと。あ、ごめんさい。わたくしの名前はブランカ・シエリル・バレイ。白の将軍バレイ侯爵の一人娘よ。よろしくね、ってあまりよろしくしたらいけないのだけれど……。とにかく、これからはよく顔を合わせることになるから覚えておいてね！』

『おっしゃる通り、私はマリエッタ・ベル・クローネ。クローネ男爵の次女です。でも私と貴女とは身分が違うから、私なんかと仲よくなっても仕方がないと思うの……』

『だーかーらー、別に仲よくなる気はないの。貴女とわたくしはライバルなのよ。胸を張ってもつと堂々としてらして！ 身分がどうこう言っちゃって、所詮は親の身分よね？ まだ何も成し遂げていない子供なんてみんな一緒。それに、私なんかっていうのは禁止ね！』

ブランカは人差し指をピシッと突き立てて、彼女にそう意見したらしい。見た目と違ってよく喋り表情がくるくる変わるブランカに、マリエッタはつい笑ってしまったそうだ。

『そーそー。その顔よ、マリエッタちゃん！ 貴女、美少女なんだからもつと笑って見せつけないと。あとは課金してドレスね！』

最後の言葉の意味がよくわからないが、そんな不可解な行動がブランカらしい。あいつは、口調はきついが根は優しいのだ。

「だから不思議なんです。ブランカ様が、『わたくしをバレイ侯爵家の者と知つてのことかしら？』なんておっしゃるなんて……」

「君のことをライバルだって言ったの？ 初めて会った時に？」

金髪に王家特有の緑色の瞳を輝かせたカイルが口を挟んだ。ブランカのことになると気になるらしい。

「ええ。なんのライバルなのか、よくわからないのですけれど」

「そうだな。あいつの考えと行動は、昔から知る俺でもいまだによくわからない」

結局、ブランカがいらないのにこれ以上集まってもおもしろくないと、この日のお茶会は中途半端にお開きとなった。

お茶会から数ヶ月後。この日、私、ブランカは朝から自宅学習をすることになっていた。悪役に勉強は必須だ。

知識が多ければ多いほど意地悪の幅が広がるし、頭のよい子はひいきされやすい。

そもそも『プリマリ』のシナリオがグダグダなのはブランカの頭があまりよくないせいだ。

デート中たまたま一人になったマリエッタに「リ्यूークはわたくしにメロメロで、あんたのことなんてなんとも思っていないんだからね」とわざわざ言いに行ったり、ハサミを持ったまま「マ

リエッタのドレスを切り裂いたのは、わたくしじゃないわ」とカイルに言い張ったり。基本的に、すぐにバシる嘘しかつかない。意地悪も、落とし穴や靴を隠すなどの単純な小細工しかしていなかった。

だから、あっさり気づかれてしまい、そこまで感動的な救出劇が起きないため、ヒロインと攻略対象の密着度合いが今ひとつのままになってしまうのだ。

悪役令嬢がバカじゃいけない、バカじゃ！

私は気合を入れて勉強部屋となっている図書室に入った。

窓を背にして立っているのは、肩までの柔らかな栗色の髪の知的な男性だ。朝の光が当たった髪は一部金色に見える。

「ルルー先生、お待たせしてすみません」

「いいえ、私が早く来すぎただけだから。おや？ ブランカ、今日の髪型もとても似合っていて可愛らしいね」

彼は琥珀色の瞳を細め、私にとこりと微笑みかけた。

家庭教師のカミーユ・フォルムルルー先生、多分二十歳ぐらい。

二十四歳の記憶を持つ私にとっては、マリエッタの攻略対象であるガキンチョ達より、先生みたいな大人のイケメンを見ているほうが楽しかった。

それにしても、七歳の子供の身体が恨めしい。せつかく毛先を編んだおしゃれな髪型にしてみても、可愛らしいとしか言われないのだ。

まあ、私の将来の予定は商人のおかみさんで、決して学者の奥さんではないので、問題はないが、あ、ちなみに先生はゲームにも出てくる。悪役令嬢ブランカの学力の低さと横暴に耐えかねて彼女の家を辞めた後、王宮で魔法学者になる設定だ。ちなみにマリエッタの攻略対象ではない。

「ありがとうございます。髪が長いと勉強の邪魔になると思ひまして。今日は魔法の歴史と構成法でしょうか？」

「そうだけど、君はまだ小さいのだから、そんなに焦らなくていいんだよ」

優しく窘めるように先生が言う。彼が言うように『プリマリ』の世界では魔法を使えるようになるのは、十歳前後からだ。それに、魔法を使える者は生まれつき魔力を持つ、ごく少数の者に限られている。

ちなみにこの世界の魔法は、地・水・火・風の四大元素と光と闇の計六属性。残念ながらブランカは魔法が使えない。

「それより今日は私の母校、王立カルディアノ学園の話しよう」

先生はそう言った。

待ってました！ ゲームの舞台『王立カルディアノ学園』のことが聞けるなんて、素晴らしい。「まず、学園ができた理由について説明するね。この国には海がなく、四方を他国に囲まれている。そのため以前は魔法よりも軍事を重視していたんだ。そのせいで魔法はどんどん衰退していった」確かに、この国では魔法を使える人の数が少ない。

「ところがある時、高位魔法を使える人物がこの国に現れた。そして、彼が戦場に出ると、通常の

兵の何倍もの働きをする。そこで国は魔力保持者を保護し訓練しようとして、学園を設立したんだ。そんなわけで現在は、魔力を持つ十二歳から十八歳の者が学園で学べることになっている。また、魔法を使える者は優先的に職業を選べるし、魔力保持者同士の結婚が推奨すいしょうされている」

勉強よりもいちゃラブを優先していたヒロイン達が何も言われなかったのはそのせいか！
「十二歳になると、この国の子供はみな、テストされるんだ。魔力が特に優秀な学力を持つ者は王都に集められ、王立カルデアーノ学園へ入れられる。その他の者は地方に分散する王立の学校に通う」

異世界に転生しても学校はついて回るらしい。まあ私は学園に行きたいから、OKなんだけど。

「ただし例外がある。大貴族は『カルデアーノ学園の卒業生』というステータス欲しさに、我が子をこぞって学園に入学させたがる。そのために学力優秀者を集めたはずの『普通科』には金持ちだけを集めたクラスが作られているんだ」

知ってるー。だって、ブランカはそのクラスだったもん。そして、クラスの大半は魔力持ちとの結婚を夢見る貴族の子供だった。

「魔力持ちは『特進魔法科』に入り、他は『普通科』だ。『普通科』は学力別にクラス分けされる」
そう。ブランカのいる金持ちクラスは学力が最低ラインだから、マリエッタ達を通う『特進魔法科』の教室から一番遠かったもんね。休み時間のたびに取り巻きを引き連れて、離れたマリエッタちゃんのクラスに嫌がらせをしに行くのは面倒くさ……大変そうだ。だから私はなるべく『特進魔法科』の教室に近い、学力の高い『普通科』に入りたい。

もちろん本当は『特進魔法科』に通えるのがいいのだけれど……

「今一生懸命学んでも、魔力がない人は魔法を使えないってことですよね？」

「残念ながらそうだね。でも、魔法について知っておくのと知らないのでは雲泥うんでいの差があるよ。魔力がなかったとしても、君にはぜひ学園で学んでほしい」

ゲームの通りなら間違いなく私はカルデアーノ学園に入学できると思う。でも一番おバカなクラスはカッコ悪いし、マリエッタちゃんの騎士ナイト達に魔法で攻撃された時にスゴスゴ引き下がるのも嫌。

本気で悪役令嬢になると決めたからには妥協しない。マリエッタちゃんをドラマチックなヒロインに仕立て、攻略対象との魅力的ないちゃラブを見るため、勉強は必要だ。

「何か質問はある？」

「いいえ。先生の授業は楽しいし、とてもわかりやすいです」

「そう。それならよかった。でもさっきのは、去年学園を卒業した私独自の考え方だから、他の人にはナイショにしててね？」

そう言うと、ルルー先生は私に向かってウインクした。

うん。わかった……って、先生若いな！年齢は公表されていないので知らなかった。

「去年卒業されたことは、先生はまだ十代？」

「今十八歳だよ。幾いくつに見えていたの？」

飛び級！成績優秀だったんだ!!

「二十歳くらいかと……。でしたらなぜ、先生は当家にいらつしやるのですか？ どこへでも就職が可能でしたでしょうか」

家庭教師より王宮の研究者や学者になるほうがよっぽど名誉だし、お金になる。

「そうだね……貴族の相手は学園の中だけで疲れたから、かな？ 学生のうちから私の魔力を手に入れて、利用しようという者が多くてね。随分誘いをかけられた。大貴族の相手は疲れる」

「同じ貴族でいらつしやるのに？」

「違うよ。私は平民の出身。魔力があつたから王立学園に入学しなければいけなかったけれど、やっぱり馬鹿にされてね。そんな私に声をかけてくれたのが君のお父さんだ。だから、侯爵の温情には感謝しているよ」

「温情？」

「ああ。君のお父さんは私に無理強いをしなかった。『君さえよければ』と一言つけ加えてくださったんだ。自分の意思を尊重されたのは初めてのことだった」

そう言つて先生は、照れたように笑つた。

わーかーるー。人間つて疲れた時は人間不信になつて何もかもが嫌になるもんね。

念のため、「先生は、商人に興味はありますか？」と聞いてみたら、明らかに変な顔をされてしまった。ちえつ。

——コン、コン。

その時、図書室の扉をノックする音がした。

先生と楽しく勉強中なのに、私の癒^いしの時間を妨害するのは、誰？

「邪魔するぞ」と入つてきたのは、水色の髪と瞳のリュークだ。私が必死にスチルを集めていた彼ではなく、子供バージョン。

なんと、リュークはブランカの幼なじみだった。

「ルルー先生ですか。いらしていたとは気づかず、すみません」

リュークはルルー先生に挨拶した。優しい先生は彼の言葉に頷くと、笑みを返す。

だけど、絶対嘘！ 計算高いリュークが確認もせずには部屋に入つてくるはずないもん。私がサボつてるとふんで、それなら邪魔してもいいと思つて、来たんだ。

私と彼は父親同士が親友。そのせいで、リュークは何かと私の前に現れる。カイル王子と親友のはずなのに、王子以外に友達がいらないのか、パーティーやお茶会には必ず私を誘うのだ。

「今日はもう十分勉強したから、私はこれで」

ルルー先生は帰つてしまった。私のリュークに対する不満は最高潮に達する。

「ちよつとリューク、どういうつもり！ 私が勉強中だつて知つてたでしょ？ ちよつとくらい待つてくれてもいいじゃない」

「はあ？ なんて俺がお前に指図されなきゃいけないんだ。見たところ本も開いてないし、本当に勉強してたのか？」

「ちゃんとしてたわよ！ で、なんの用なの。用事があつたんでしょ？」

「ああ、実はブランカに見せたいものがあつて……」

彼はデスクの上におもむろに両手を乗せると、手のひらを上にして水をすくうような形にした。見たところ何もなければ、何を見せようというのだろうか？

「よく見てて」

小さな彼の手の中には相変わらず何もない。

——そう思っていたら、ジワーツと透明な液体が湧いてきた。

「すごい！」

魔法だ！ 私は目を丸くした。

「まだだ。まだよく見てて」

水と思われる液体が今度はみるみる凍り始める。そして、彼は手の中の氷を一瞬にして消し、握りしめる。今度は握った片手を上げ、ふわりと開いた。

舞い落ちる、ひとひらの雪。

怒っていたことも忘れ、私は目の前の光景に感動して泣いてしまった。

リュークの作り出した雪は今まで見たどんなものよりも儂く、そして美しい。

気づけば彼に抱きついていた。

「すごい！ すごいよ、リュークウ〜〜〜!!」

ゲームで彼が『水』の魔法を使えることは知っていた。けれど、スマホの画面を通して見ると、自分の目で見るのでは大違い！ 冷たさも、じわつと溶けて机に広がる雫もそこにある。

リュークは私を見ると、水色の目を細めて照れたように笑った。

長椅子に移動して並んで腰をかけ、私は早速幼なじみに質問する。

「ねえ、どうして自分が魔法を使うって気がついたの？」

魔力は普通十歳くらいで顕現するから、八歳で気づくのはかなり早いほうだ。

「ああ、きっかけね。朝、洗面用の水が入ったボウルに袖を引っかけて、水をこぼしてしまったんだ。すぐに拭き取ろうと思ったんだけど、タオルが近くになかった。で、『こぼれた水が自分で戻ればいいの』って考えたらできた」

「たまたま？」

「そう。なんでそんなふうに思ったのか、単に面倒くさかっただけかも。とにかく、こぼれた水の上に片手をかざしたら、水が吸いついて来たんだ！」

「すごい！」

「俺もびっくりした。焦って手をボウルに向けたら、パシヤンと音を立てて水がすべて戻ったんだ。だからもしかしたら俺は、水を思い通りに動かすことができるのかも、って」

「タオルを置き忘れた人に感謝しなくちゃね？」

「そうだな。それで、この国に魔法が使える者がいることは知っていたから、自分もそうなんじゃないかなと思って……。その後は何度も試してみた」

「さっきの魔法、実際にはどうやったの？」

魔法が使えるなんて、羨ましい。

「頭の中に、手に水が溜まるシーンをイメージする。それから、凍る様子を思い描いた」

「魔法の発動に必要な魔法陣や呪文は？ 何か特別なことをしている？」
「必要ない。ただイメージを頭の中に描くだけでいい」
「それだけでいいの？ あ、じゃあどこでも使える？ あと水の量は無限に出せるの？」
「ブランカ、今日のお前は質問攻めだな」
「だって本当にすごいもの！」

魔法が全くなかった世界から来たので、感動が大きい。自分も使ってみたいものだ。リユークは私が食いついたのがよほど嬉しかったのか、苦笑しながらも丁寧に答えてくれた。

「近くに水場があれば手の中に呼び寄せることができるし、少しの量ならそのまま凍らせることもできる。量はおそらく魔力との兼ね合いで限界があるようだ。俺はまだ、多くの水は動かせない」「でも雪って……。かなり難しかったでしょう？」

「いや。状態を変化させるだけだから。液体から固体へ。水を急激に変化させればできる」彼は簡単に言うけれど、普通の人にはできない。

魔力があれば王立学園『特進魔法科』の入学が許可されるので、リユークは入学確定。卒業すれば安泰らしいし、公爵家の嫡男で将来はイケメン。彼の未来は薔薇色だ！

「ねえ、今日はどうしてわざわざうちに来たの？」

「この水の魔法を、誰よりも先にお前に見せたかった」
ほら、そんなことを言ってくる。これだから攻略対象は。マリエッタちゃんだけじゃなくて悪役令嬢の私までドキドキさせて、どうしようというのだ。

しばらく魔法の話をした後、私は玄関までリユークを見送りに出た。いつもより長く彼の背中を見つめて考える。

さつき魔法を見せてくれた彼はちよつとカッコいいなって、感激してしまった。

だけど彼は攻略対象だし、筆頭公爵家の嫡男だから商人には絶対にならない。

幼なじみで喧嘩してばかりいる彼のが気になるなんて……

——初めて会った時の彼は、四歳だといふのにとでも落ちついていて。庭で父を探していた時に出会ったのだ。

葉っぱだらけの私を不思議そうに見ながらも、彼は優しく手を引いて『一緒にお父さんを探そう』と言ってくれた。すごく綺麗な男の子だから、私も思わず目を奪われたのを覚えている。

当時の私はまだ前世の記憶がなく内弁慶で、ワガママなのに人見知り。そんな私が、リユークにだけはすぐに打ち解けた。三歳児の相手なんて嫌だったろうに、彼は私にいろいろ質問して父を見つけてくれたのだ。

その後、五歳の時に、屋敷の階段の手すりを滑って遊んでいて落下し、前世を思い出したのだけど、それまでは淡い憧れの気持ちを抱いていたような気がする。

そんな私が再びリユークと出会ったのは、前世を思い出した直後だ。

彼は図書館によく通う子供だった。

そして、記憶が戻ったばかりの私も、この世界をよく知ろうと図書館に通ったため、思わぬところで再会となったのだ。

マリエッタちゃんの攻略対象がどのくらいゲームのキャラクターと同じなのか気になった私は、意地悪だとは思いつつ彼に議論をふっかけてみた。

貴族と平民の不平等な扱いについてどう思うか、と問う。最初、この世界の常識とかけ離れた私の考え方に彼は啞然としていた。貴族と平民を同等に扱うなど、あつてはならないことだから。でも彼は、私の考えを否定しなかった。

リユークはずっと考え込み、私の思想に興味を示したのだ。

以来、私達は時々、議論をしている。日常の様子、大人達の考え、読んだ本のこと。周りからはきつと可愛くない子供だと思われているだろう。

私はといえば、懐かれてるのは困るものの、彼と話すのは楽しい。

中身が大人の私と話が合うのは彼しかいないから、たとえ将来別々の道を歩むとわかっていても、リユークと過ごす時間は私にとつてかけがえのないものだ。

そんなことを考えていた時、ふと頭の中に映像が浮かぶ。

それは、リユークとデート中のヒロインをブランカが突き飛ばすシーン。その場面で、彼女は自信たっぷりにマリエッタに向かってこう言い放つ。

『貴女、わたくしのリユークに……』

「あ」

ゲームの設定を思い出した私は、驚いて一瞬固まった。

リユークのルートでは、彼とブランカは子供の頃に婚約していた！

「ハアアアア、どーしよう？」

婚約のことなんてすっかり忘れてた。

その日、私はそれとなく晩餐ばんさんの時に尋ねてみる。

「ねえお父様、もしかしてわたくしの婚約の話——」

「ああ、もう知っているのか、誰に聞いたんだ？ 私から直接話そうと思っていたのに……。まだ正式ではないが、公爵家からリユークとの婚約を申し込まれている。お前達は仲がいいから嬉しいだろう。今日も一緒にいたそうだな？」

やっぱり……。お父様達の仲がよすぎるのは問題だ。

白の將軍と呼ばれ国の軍事を担当している私の父クロードと、宰相として辣腕らつわんを振るうリユークの父エドアルドは、カルデアアノ学園時代からの親友だ。家族ぐるみの付き合いがあるから、当然、奥様同士も顔見知りで、この婚約話にはみな大層乗り気なんだとか。

もちろん、ゲームを盛り上げるために必要なことであれば、私も反対したりしない。でもね、ブランカが婚約するのは何もリユークとだけではないのだ。

『プリマリ』の前半は全キャラクターの共通ルートだが、後半は一番好感度の高いキャラクターとの個別ルートになる。ブランカは、リユークルートではリユークの婚約者、カイル王子ルートではカイルの婚約者として登場するのだ。

ゲームではマリエッタちゃんのルートが確定してから婚約者を選べばいいのだろうが、現実では無理だ。

私はいったい誰と婚約するのが正解なの？

「マリエッタちゃんがカイル様を選ぶなら、やっぱり彼と婚約しといたほうがいいのよね」

考えても考えても、わからない。カイルからの申し込みがあるという話は聞かないけど、ここは事前にマリエッタちゃんがどちらのルートに進みそうか調査したほうがいいわよね？

私は早速、計画を立てた。

「ほらリユーク、恥ずかしがってないで行くわよ！」

「チッ。なんで俺がこんなところに」

「まあ、失礼でしょう！ 美少女のお宅よ、美少女の。この時間は家にいるって聞いたんだから」私とリユークは今、マリエッタちゃんのいるクローネ男爵邸の前にいる。

こうなったらもう、誰が一番気になっていいのかヒロインに直接聞いてみるしかない。そう思ったものの、彼女とあまり仲よくしてはいけない私は、幼なじみのリユークを誘った。

これをきっかけに彼とマリエッタちゃんの距離が縮まれば、それはそれでいいことだ。私はそのままリユークと婚約して、嫌がらせに励めばいい。

「頼もう！ じゃなかった。門衛に取次をお願いしなくちゃね」

そう言つて門衛を探そうとした瞬間、門が開いて、執事らしき痩せた人物が焦つた様子で出てきた。

「これはこれは、バルデイス公爵令息様、バレリー侯爵令嬢様。お越しいただき大変恐縮です。本

日は当家のどなたとのお約束でしょうか？」

「いいえ、約束もない突然の訪問をお許しください。僕と友人のブランカが、日頃親しくさせていただいているマリエッタ嬢を散策にお誘いしたく、勝手に参りました。お取次をお願いできますか？」

「おお、さすがは腐つても公爵子息！ リユークの態度は完璧だ。誘つてよかった。

「さ、左様ですか。では、中へどうぞ。高貴なお方をこのような場所でお待たせしては当家の恥となりですので……」

「いいえ、僕らは全く気にしません。天気もいいのでこちらでお待ちしております」

リユークがダメ押しでニッコリ笑う。

さすが未来のイケメン！ 執事のじい様にも効いているみたいよ。

執事は慌てて屋敷に戻っていった。

「それにしても執事がすぐに貴方がわかるとは。リユークは有名なのね！」

「仕える主家の交友関係を把握しているのは、執事として当然だろう。俺達が乗ってきた馬車に紋章も入っているし、俺の水色の髪もお前のラベンダー色の髪もわかりやすい。どちらかと言えば彼が有能なんだ」

そっかあ、そうだよ。甘やかされている私は、貴族としてのマナーや知識はほとんどゲームから得たものだけど、彼は八年も公爵の息子として自分を磨いているのだね。やっぱりハイスペックなお坊ちゃんなんだなあ。

「なんだ、ジツと見て。俺に惚れたか？」

「ふふっ、何それ。まっさかあ〜」

そんな言い合いをしていたら、タタターッと軽い足音が近づいてきた。

「ブランカ様、リユーク様、ごきげんよう。嬉しい驚きですわ！」

マリエッタちゃんだ。白いドレスがよく似合って、可愛らしい。まるで天使！

「ああ、それと、ブランカ様。このドレス、父がまたいただいて来たようで。ありがとうございます」

「あら、いったいなんのことかしら？ 覚えがないけれど。もしうちの父から貴女にさしあげたものとしてもゴミよ、ゴミ。捨てるものをどうしようかとたくしの勝手じゃない？」

もちろん、覚えはある。今、マリエッタちゃんが着ている服は彼女によく似合うと思っただけだ。当然新品。だって、この世界ではガチャがないから課金でアイテムが買えないんだもの。だから父に頼んで、直接持っていつてもらうしかなかった。娘に甘い父は『ブランカにも女の子の友達がいんだな』と喜んでいた。

そして思った通り、白い生地^はに金髪が映えて、マリエッタちゃんはすごく可愛らしい。その笑顔で私はもちろん、リユークもイチコロね！

「フン、それにしてもわたくし達をいつまで待たせるのよ。ホントに貴女ってトロいわね！ わざわざ誘ってあげたんだから、ありがたく思いなさいよ」

「おい、自分が一番張り切っていたくせにそれはないだろう？ ごめんね、ブランカは素直じゃな

いんだ」

「いいえ。ふふふ、お二人は仲がよろしいんですね！」

「はあ？ 貴女、目が腐ってるんじゃないかと？」

リユークと仲よしに見えると言われるのは、本当はちよつと嬉しい。……だけど、貴女よ、貴女！ リユークと親しくならなくちゃいけないのは！

そんなこんなで私達三人は護衛をつれて、マリエッタちゃんお気に入りの場所にピクニックへ出発した。

秋の空はすっきり晴れて気持ちがいい。この国には日本と同様の四季がある。ちなみに暦も前世と同じ十二ヶ月だ。

マリエッタちゃんが案内してくれたのは、小さな湖のほとりだった。日の光が湖面に反射してキラキラと輝き、鳥がさえずっている。こんな素敵な場所があるなんて知らなかった。マリエッタちゃんとリユークのデートにピッタリ！

芝生にブランケットを敷いて、私、リユーク、マリエッタちゃんの三人で座る。

本当は二人きりにしてあげたいところだけど、お腹が空いているし聞きたいこともあるから、先にお昼にしよう。

用意してきたランチボックスの中にはチキンやサーモン、アボカドやエビなどのオープンサンドと、ローストビーフとシチューパイ、タルトやフルーツなどが食べ切れないくらい入っていた。飲み物も葡萄や林檍の果実水はもちろん、温かい紅茶も準備してもらってある。どれもとても美味し

くて、三人で仲よくランチを味わった。

さあ、あとはリエッタちゃんに好きな人を聞くだけ！

「好きな男の子？ 特にいませんわ。そういうブランカ様はどなたがお好きなんですか？」

「だーかーらー、さつきから言ってるでしょ？ 頭が悪いわね。わたくしのことはいいから、貴女が誰が好きなのか、もしくは気になってるのかをちゃんと言いなさいよ！」

「あら、ズルいですわ。ブランカ様だって誰が一番お好きなのか、私に教えてくださらなければ」

「はあ？ なんてわたくしが。わたくしはこれから出会うから、よろしいの！」

「それなら私もきつとこれから、ですわ」

「ちーがーうー。貴女はもう出会っているのよ。自分では気づいていないだけ。だから、ちょっとでも気になっている人がいたら、わたくしに教えなさい！」

「それなら、ブランカ様も……」

さつきからずっと同じ会話。呆れたのかリユークはさつきと湖のほうへ行ってしまった。

まったくもう、リエッタちゃんったら頑固ね！ 誰が好きなのかちゃんと言いなさいよつ。

リユークはなかなか戻ってこないが、彼の得意な魔法は水属性だから、万一、足を滑らせても、溺れる心配はないだろう。

私とリエッタちゃんとの押し問答はエンドレスで、疲れてきた。少し気分を変えたくて、私はリユークがいる湖のほうに目を向ける。

彼は湖に向かって両手を広げていた。彼の前では、湖の水の粒が下から上へ昇っている。十分に

上がったところで彼が両手を下ろすと、湖の水は雨のように、下へ落ちていった。いつの間にこんなに大きな魔法を？ この前見せてもらってから、幾日も経っていないのに。彼が操る湖の水はどんな範囲が広くなり、水の粒も細かくなっていく。隣のリエッタも私と同じように、ポカンと口を開けて彼の魔法を見ていた。

リユークが何度か同じことを繰り返すと、突然、空の景色が変わる。
——それは、湖の上に浮かんだ虹。
もつと近くで見たくて、リエッタと二人で思わず駆け出した。

「ステキ、ステキ、ステキ！ 素晴らしいですわ、リユーク様！」

リエッタはリユークにいち早く辿りつき、可愛らしく手を叩いたり肩に触ったりして、感激を身体全体で表現する。リユークは褒められて嬉しかったみたいで、彼女を見つめ、にっこりしていた。

……ああ、そうだ。リユークは彼女の攻略対象だった。彼が選ぶのはリエッタちゃん、私ではない。

これはリエッタちゃんに想いを届けようと、リユークが架けた虹の橋だ。

リユークが私に目を向ける。リエッタちゃんのために作った虹の感想を私に聞くの？

「美しいわ」

小さく呟いた。だって、貴方の想いがこもっている。

「ああ、リユーク様。私、初めてこの目で魔法を見ました。感動で涙が出ましたわ！」

マリエッタちゃんはまだ興奮がさめないのか、彼の背中をビシバシ叩いている。痛そうだけれど、リュークは微笑んでいた。

私が仲を取り持たなくても、彼らは自然にくつつく運命だったみたい。だから私にリュークとの婚約話が来たんだ。

こちらを見ているリュークは怪訝な表情をしている。

その顔が「なんでブランカがいるんだろう。マリエッタと二人きりならもつとよかったのに」と、言っているように見えて、私の心はちくんと痛んだ。

ごめんなさいね、近くにいる。貴方達のハッピーエンドのために明日から妨害するけれど、今は二人きりにしてあげるわ。

私はリュークとマリエッタに微笑みかけると、邪魔をしないように、ブランケットに戻った。目をギュッと閉じて鳥の声を聞く。仲よくしている二人を見て涙が出そうになるのは、胸が締めつけられるように感じるのは、なぜだろう？

水色の髪と瞳は私のものじゃない。最初から、わかっていたはずなのに。

再び目を開けると、まだ仲よく寄り添っている二人の姿が飛び込んできた。

マリエッタちゃんがリュークの肩に手を添え背伸びをして、耳元で何かを囁いている。真っ赤になるリューク。楽しそうなマリエッタちゃん。ほらね？ 二人はやっぱりとお似合いだ。

その日の夜、私は自室のベッドの上で枕を抱えながら悩んでいた。

「リュークとマリエッタちゃんが仲よくしているのに、なんで嫌だなんて思ってしまったんだらう」

これは、私の計画通りだ。でも――

「あんなふうに微笑みかけることないじゃない！」

私に水の魔法を見せてくれた時と同じように、マリエッタちゃんに笑いかけたリューク。

本当は喜ぶべきなのに、なぜだか胸が痛い。

「リュークと一緒にいすぎたせいで、自分のものを取られた気分なのかしら？ 悪役令嬢ブランカともあろうものが拗ねてしまったのね！」

大人としての前世の記憶がある私が、子供相手にモヤツとするなんて、ありえない。

私は深いため息をついた。

「マリエッタちゃんはリュークが好きってことでいいよね？」

今日の様子を見る限り、間違いなさそうだ。

「まあ私は悪役令嬢だし、ルートが確定していたほうが活躍できそうだけど――」

悪役としてマリエッタを輝かせると決めているんだもの。この苦しさは何かの間違い。私は二人の邪魔をするためにリュークと婚約できるように頑張らなければいけないのだ！

翌朝、父のクロードが「今日は、一緒に王宮に行こう」と言いだした。

父はプラチナブロンドの髪を後ろに撫でつけた、がっしりとした体型の美丈夫だ。鼻筋の通った

イケメンで、若い頃は相当モテたと思う。軍にいるせいか外では厳しい表情をしているけれど、家に帰れば妻と娘に甘々デレデレのおっさんだ。

私は、働くカッコいい父の姿が見られるかと期待して、ついていくことにした。ところが、案内されたのはなぜか国王陛下の御前。

ふかふかの絨毯の上にある豪華な椅子に座っていらっしやるのは、絵姿などで誰もがよく知る国王陛下だ。正式な謁見ではないとはいえ、父だけでなく私が招かれた理由がわからない。

「ようこそ。そちらが侯爵ご自慢の娘さんだね。小さい頃に会っているのだが覚えてるかな？ 名前は、確かブランカと言ったな」

「はい。バレリー侯爵クロードの娘、ブランカにございます。陛下におかれましてはご健勝のほど喜ばしく、拝調の悦びに与れたこと至極光栄に存じます」

挨拶の言葉は間違っていないよね？ 前世では使ったことがない言葉なのでドキドキしてしまう。「これは、これは。息子達の言っていた通りしつかりしたお嬢さんだ」

「過分なお言葉。身に余る光栄です」
「うむ。それで、侯爵。例の話は考えてみてくれたかね」

「ええ。ですが陛下、カイル様もジュリアン様もまだご見聞を広める時期。相手を決めるのは尚早かと。もっと相応しい相手が現れるやもしれませぬ」

あ、なんか大体話が見えてきた。なんとカイルとの婚約話も出ていたのね。なんで貴族って、小さいうちから相手を決めるのかしら……

「まあまあ、すぐに断らずとも。お互いによく知り合う機会を与えてやるくらいはよかろう？」
王様、それは大きなお世話です。何しろこっちのルートはマリエッタちゃんを選ばなかったから——って、まさか後から選んだりしないよね？ どんどん不安になってくる。

とりあえずここは様子を見よう。カイルに会ってマリエッタちゃんへの気持ちを確かめたほうがいいかも。だって、もしかしたら……

「お父様、せっかくですからわたくしも王子様達と遊びたい」
父の服の袖を引っ張り、わざと可愛らしく言ってみる。

「おお、そうかそうか。息子達は庭にいます。せっかく来たのだから仲よく遊ぶとよい」
王様が目を細めて頷く。甥のジュリアンの面倒もちゃんと見ているみたいだから、それだけは安心した。

案内された庭は、この前お茶会をしたところではなかった。コスモスや薔薇、キンモクセイなど色とりどりの花に囲まれたガゼボ——東屋だ。そこで、第二王子のカイルが年下の従弟ジュリアンに勉強を教えている。その微笑ましい光景に思わず頬が緩んだ。

いち早く私に気づいたジュリアンが嬉しそうに顔を綻ばせ、ブンブンと手を振る。子犬のような耳と尻尾まで見えるようだ。カイルが彼を見て、苦笑していた。

「あら？ この景色って……」
どこかで見たような気がする。もしかして、既視感？
そう思った途端、私の身体はガタガタと震え出した。

だってこれは、マリ、エツタちゃんの心象風景だ。『プリマリ』の中で、ヒロインが過去を振り返る時に必ず出てくる、カイルとの大事な思い出のシーン――

そして、私の意識は薄れた。最後に覚えているのは、倒れた私を助け起こしてくれたカイル王子の腕と声。

「大丈夫？ 怪我はない？」

――この世界は、何かがおかしい。

私が知っている『プリマリ』の世界とは、少しずつ違うようだ。

明け方に怖すぎる夢を見た。それは、前世でハマっていた『プリマリ』にまつわる噂を聞いた時の再現だ。

もしもゲームでヒロインがすべての攻略対象と上手くいかず『バッドエンド』を迎えた場合のストーリーだ。それは、キャラクター全員が不幸になるというものだった。マリエツタの学園卒業から数年後、この国は一斉に他国から攻め込まれ、滅びる。

『プリマリ』はいわゆる、ぬるゲーだったので、私自身はバッドエンドになっただけで済まない。あくまでもこれは噂だ。のほほんとしたお気楽なゲームのエンドが本当にそうなるのか、と疑ってもいる。

でも、もし本当だったら？

ゲームと違ってやり直しはできないのだ！ 商人のおかみさんなんかになっている場合ではない。

熱を出した私は自宅のベッドの上でうんうん唸っていた。今の状態は知恵熱に似ている気がする。幼い身体は病氣や熱に弱い。

私は熱に浮かされながら、もう一度ゲームのストーリーを思い出してみた。

――ある日、王宮に行った小さなヒロインは、仕事相手との話に夢中の父親を置いてふと出た庭で道に迷う。心細いまま歩いてみると、見えてきたのは花に囲まれた白いガゼボ。そこには輝く金の髪と銀の髪の少年がいた。銀の髪の少年が少女に気づいて手を振ってくれる。金の髪の少年はそんな彼を見て苦笑した。

夢のようなその光景に思わず彼らに近寄ろうとしたヒロインは、足下の石に躓いて転んでしまう。泣き出しそうな彼女に、金の髪の少年が慌てて駆け寄り優しく助け起こす。

「大丈夫？ 怪我はない？」

頬を染め、はにかみながら微笑むヒロイン。金髪の少年は澄んだエメラルド色の目を細めて、そんな彼女に見惚れる――

これは、ただの偶然だろうか？ あまりにも似ていると思うのは、気のせい？ 考えすぎたせいかな、また熱が上がってきたようだ。

「ハア、ハア、ハア」

親か侍女が側にいるはずなのに、熱のせいで目が潤んでボヤけてよく見えない。

「私、死んでしまうのかしら？」

ふいに、小さな手が私の額に当てられた。冷んやりしていて気持ちがいい。

冷たい霧状の水がそこから顔に広がっていく。自分の横には、水色の塊かたまりが。

「リユークなの？ こんな時に貴方の魔法は便利ね」

冷たいミストのおかげで少しだけ気分がよくなり、私は微笑んだ。

——ねえリユーク、本当は私、貴方と婚約したかった。貴方の隣は居心地がいいから。だけど、貴方はマリエッタちゃんのもの。私のものには決してならない。

言葉は高熱のため、声にならない。

——私に見せてくれた魔法を、他の誰かに嬉しそうに見せる貴方が嫌だった。水の魔法は私だけに見せてくれたと思いたかった。二人を応援しなきゃいけないのに、本当は仲のよい二人に嫉妬しつとしていたの。だから、ストーリーが変わっちゃったのかな？

ヒューヒューと息が漏れ、言葉が単なる音になる。

——私は商人のおかみさんでいい。だから頑張って悪役令嬢をして、貴方達を幸せにしてあげたかった。私にはそれで十分……そう思っていたのに。

熱で潤うるんだ瞳から、ポロポロと涙がこぼれる。具合が悪くなると心も弱くなるから嫌だ。

誰かがそっと、優しく私の涙を拭ぬぐってくれる。

私が望んでいるのは、穏やかな暮らしとささやかな幸せ。決してバッドエンドじゃない。

でも熱が下がるまでは、悪役令嬢を休ませて。

私はまた、深い眠りの世界へ落ちていった。

その日、俺——リユークは父の書齋にいた。

「手紙にはなんと？」

「国王陛下がカイルとブランカとの婚約を望んでいると……。近々その件で、侯爵親子が王宮に招まばれるだろうと書いてありました」

届いた手紙を父に差し出す。第二王子のカイルからの手紙だ。

俺はブランカとマリエッタ、三人で行ったピクニックのことを思い出した。ブランカの様子が少ない変だったのは、もしかしたらこのせいなのか？

ひよっとしてカイルとの婚約を悩んでいる？ そうだったら嬉しい。彼女とカイルとの婚約が決まってしまえば、今までのように親しく話せない。それは何よりつらかった。

「おや？ ブランカちゃんなら昨日、父親のクロードと一緒に陛下にお会いしていたような。緊張のせいか熱を出してすぐに家に戻ったと聞いているが……」

「父上、それは本当ですか！」

あいつは国王に会った程度で緊張するほどやわじゃない。小さい頃から知っているのだ、それくらいはわかる。

だとしたら、倒れた原因はなんだろう？ もしかして、もう婚約が内定したのか？

焦燥に駆られた。

「父上、馬車をお借りします。侯爵に何か伝言はありますか？」

「馬車は構わないがリューク、護衛はちゃんとつけて行けよ？ それから、ブランカちゃんによるしく。もしクロードに会ったら、婚約の申し込みはうちのほうが先だと言ってやりなさい」

「わかりました。すぐに出ます！」

急いで部屋を出る途中、父の呟きが聞こえた。

「やれやれ。クロードの娘が陛下にまで目をつけられていたとはね。リュークも大変だ」

侯爵家へ向かう馬車の中で俺は考えていた。

今まで、自分の手に入らないものなどないと思っていた。

代々国の要職に就くバルデイス公爵家の長男として生まれた俺。幼い頃から学問やマナー、剣術、馬術などを高い水準で身につけることを要求されたが、難なくクリアしている。

そんな俺が父と共にバレリー侯爵家に初めて行ったのは、ブランカが三歳の時だ。

トコトコ歩くラベンダー色の髪の彼女は、ウサギのぬいぐるみを思い起こさせた。笑うととても愛らしく、紫の瞳が宝石のようにキラキラと輝く。

父の知り合いの可愛らしい子供。それが初対面の印象だ。けれど、特別惹かれるものはなかった。それが二年前、再びブランカに出会ったことで変化する。

王宮内の図書館の椅子にちよこんと腰かけて、彼女は分厚い本を熱心に読んでいた。図書館に入りする子供などめったにいないので、自然と目が行く。

「あら、リューク……様。ごきげんよう。貴方も調べものですか？」

こちらに気づくと彼女は、堂々と挨拶した。その態度が以前のイメージとあまりに違い、びっくりしたのを覚えている。

「やあ、ブランカ。久しぶりだね。何を調べているんだい？」

俺は彼女に興味を持った。

「この世界に住む以上、法律を知っておかなくては、と思ひまして。もしよければ教えてくださいさらないかしら、『ドグラン憲章第三条の三項』の部分なんですけど……」

「ああ、その本は俺も目を通した。そこが何か？」

「どう考えてもおかしいんです。どうして貴族と平民とで、同じ仕事に対する最低報酬の額が異なるのかしら？」

その答えは知っていた。俺は堂々と答える。

「当たり前じゃないか。貴族は平民とは違い、何代も前から続く選ばれた家系の人間だ。優秀な者に高い報酬を支払うのは、当然だろう？」

「同じ仕事ができますのに？ 変ですわね、何代も続く優秀な家の出身でも、すべての人が優秀であるとは限りませんか？」

言われてみれば確かにそうだ。けれど、貴族の長である筆頭公爵家の者がそれを認めるわけにはいかない。

「それはそうだが、貴族は平民に比べて国家に貢献している。家名を守るために代々努力をするか

らな。中には努力を忘れ優秀でない者もいるにはいるが、大抵は他の者がカバーする」

「あら、家族が補うのには限界があるでしょう？ 個人の能力や資質を問うべきだと思いますの」
まさかブランカに政治的な議論ができるとは思わなかった。しかも、自分がやりこめられる側になるとは……

それから、ブランカとは顔を合わせるたびに議論を交わしたり喧嘩けんかをしたりしている。

一歳上の余裕を見せられずに焦あせる時もあるけれど、彼女の前では不思議と飾らない素の自分をさせるのが心地いい。ただ、最近それだけでは物足りなくなり、彼女に認められ頼たのみたいと思うようになった。

だから、どこかに行く時は必ず彼女を誘よっている。パートナーとして見られることが嬉しい。

水の魔法も一番に見せた。彼女に認めてほしい、喜んでほしい、そう思つて。

あんなに感激されたのは嬉しい誤算だ。

もう一度、喜ぶ顔が見たかった。でも二度目に見せた時は、期待していた反応が得られなかった。ピクニックに行つた先で俺の願いを込めて架けた『虹の橋』。

大騒ぎをするマリエッタとは違って、ブランカはとても静かだった。笑顔を見せてくれると思つたのに。

俺は何か失敗したのだろうか？

マリエッタが落ち込む俺の肩に手を置き、『お二人の気持ち添そえるよう、私が全力で応援いたしますわね！』となくさめられたのも恥ずかしい。俺はそんなにわかりやすかつたか？

今、親同士で俺達の婚約話が出ているという。カイルよりも先だ。ちよつと照れくさいが、俺は嬉しい。ブランカはどうだろうか？ 少しは俺のことを認めてくれていたのかな？

手に入らないものなどないと思つていた。けれど人の心は簡単に手に入らない。尊敬も信頼も揺るぎない愛情も、すべては自分で勝ち取るもの。

幼なじみのブランカが、俺との婚約を選んでくれたらいいのに。

屋敷に到着してすぐに、俺はブランカの部屋へ案内してもらつた。

彼女は高熱でかなり具合が悪く、寝込んだままだという。大丈夫だろうか？

広いベッドの上で、小さなブランカが浅く荒い息を吐いている。高熱のために手も顔も赤く、いつもの元気が全くない。寶石のような紫色の瞳も今は濁にごっている。

心配で、そつと側そばに寄り彼女の額ひたいに手を置いた。すごく熱い！

俺は手のひらに魔力を集中させる。

「水よ、霧になつて優しく彼女を冷やして！」

あ、こつちを見てブランカが少しだけ笑つた。魔法はどうやら、上手くいったようだ。誰もいないのいいことに、そのまま彼女を見守る。

淡いラベンダー色の髪は、汗で顔に貼りつき、ピンクにも見える。何も映していない紫色の瞳は、今日は曇つたアメジストのよう。何かを言っているようにも見えるけれど、よく聞こえない。

ヒューヒューと荒い息はとても苦しそうだ。

守ってあげたい。宝石のような両目からポロポロと涙を流すブランカは、ひどくつらそうだ。俺は持っていた手巾しゆかでそっと優しく涙を拭ぬぐう。

「ねえ、ブランカ。婚約するなら俺にしなよ。カイルより大事にするから」それは小さな俺の、精一杯の願いだっただ。

結局私、ブランカは、リユークともカイルとも、他の誰とも婚約をしなかった。できなかったのだ。

知恵熱だと思っていた病やまいは、実は『魔法欠損型魔力性小児麻痺』というものだった。

それは魔法が上手に使えない子供が、体内に溜まった魔力を放出できないことが原因で起こす、この世界特有の極めて珍しい病気だ。

高熱は一週間続き、やっと下がった時には、両目の視力が著いちじるしく低下し、左の足首から下に少し麻痺が残った。

今の私は、目の前にあるものもぼんやりとしか見えない。歩けないことはないけれど、足を引かずし、貴族につきものの社交ダンスが踊れなかった。

治す方法は、『光』の魔法での治療とリハビリを根気強く続けることだけだ。

当然、婚約どころではない。

婚約の話は両方共、父が出向いて断ってくれた。

「もしかしたら、これは私がリユークを好きになった罰なのかもしれないわ。早く元の身体に戻ってストリーが正常になるように頑張らないと」

私は母と、王都から遠く離れたブランジュという村に行き、そこで療養することになった。ブランジュは我が侯爵家の領地のうちの一つで、空気のよい田舎だ。

將軍である父は王都を離れるわけにいかず、毎日泣いている。

そして、私が王都を離れる当日の朝、小さな登場人物達とお別れをした。

王城でのお茶会以来、なぜか私達は図書館や観劇、音楽会や他家の催し物もよおで顔を合わせ、仲よくなってしまうっている。

彼らは私の熱が下がってすぐ、後遺症で歩きづらい私のお見舞いにも来てくれた。ぼんやりとか周りが見えない私の側そばで、楽しい話を聞かせてくれたり本を朗読してくれたりしたので。

そんなみんなとお別れするのは、とても悲しい。

「ブダンガさま、びどいぞう。ライバルでずのにー。私を置いていぐだんでー」

マリエツタちゃんが号泣した。嬉しいけれどヒロインなんだから、もっと綺麗に泣こうよ？

「ブランカ、元気で。私もどうやら『光』の魔法を使えるようだ。精進しておくから、帰ったら治療をさせてくれ」

カイルが言う。それはありがたい。ただ、ゲームのカイルは治療よりも攻撃のほうが得意だった。「ブランカ姉様。僕、勉強頑張るから。帰ったらいろいろ教えて！」

「ジュリアン、貴方に教えたがるお姉様はこれからどんどん増えるから、大丈夫ですよ」
次々と声をかけられる。

「帰ったら遊ぼうな。リユークの面倒は任せてくれ」

「どちらかというと貴方のほうが面倒をかけてらしたわよ、ライオネル」

「うちの領地は近いから遊びに行くよ。君も勉強頑張つて」

「ユーリス、貴方が勉強好きなのは知っているけど、わたくしには求めないで」

そして、最後にリユーク。

「お前の顔が明日から見られなくなると思うと寂しいよ。帰ってきたらまた相手してやるから、早く戻れよ」

そう言いながら泣きそうな目でこちらを見る。思わず私は、もらい泣きをしました。

ずっと一番近くにいたのは彼だったから。

そしてリユークは、彼の髪の色と同じ水色の薔薇を差し出した。

とっさに受け取った私は一瞬固まる。

びっくりしたり。リユークが作った『水の薔薇』かと思っちゃった。

『水の薔薇』は、大人になったリユークがマリエッタちゃんに渡す告白用のキーアイテムだ。私はもちろん、そのスチルをバッチリゲットしていた。

そんな大事なものを悪役令嬢の私に渡すはずはないと思ったら、やっぱり違った。

そんなわけで小さな彼らに見送られつつ母と馬車に乗り、この日私は王都を後にした。

心地よい風が吹く穏やかなある夏の午後。丘の上に一本だけ立つ大きな林檎の樹の下で、私は一人読書をしていた。樹の根元にはここまで乗ってきたロバを繋いでいる。

私はそのロバ——ロディに話しかけた。

「ねえロディ、お母様もそんなに神経質にならなくてもいいのにね？ リハビリを少しくらい休んだって大目に見てくたさればいいのに……」

ロディは耳をピクリと動かし、草を食んでいる。

ここ、ブランジュの村はのんびりしていて、静養するにはもってこいの土地だ。あちこちに湖や大きな林檎の樹があって、景色も素晴らしい。特に自室の窓から見えるこの丘の林檎の樹がお気に入りだ。

私は足のリハビリのために、もう二年もこの村に滞在していた。

魔法が扱える医師の治療はほんのわずかの効果しかない。あとは本人の努力で、少しずつ回復していく外なかった。

けれど、リハビリには苦痛が伴う。たまには休みたくなるのだ。

視力の回復は、効きの弱い魔法に頼るしかないので、普段は眼鏡をかけている。

幸いブランジュの隣町はガラス工芸が盛んだ。腕のいい眼鏡職人が揃う工房がたくさんある。小さな子供用の眼鏡はないので、私は特別に注文して作ってもらっていた。

それに田舎暮らしのよいところはたくさんある。